

『ドンビー父子商会』におけるプリンパー学校の教育

大森 幸享

SYNOPSIS

Dr. Blimber, the proprietor and headmaster of a Brighton school in Dickens' *Dombey and Son*, is another Mr. Dombey another in the sense that regardless of his pupils' feelings and capabilities, he coerces them into the agonizing process of premature flowering, thus making havoc of them. In his school, "a great hot-house," pupils take pain to learn vast quantities of the classics. Dr. Blimber believes in the superiority of his educational system, and fails to recognize the disastrous effects it has on the pupils. His system operates like a factory, so that pupils are exhausted. In Paul Dombey's case, his health fails. Dr. Blimber's management of school is not genuinely educational, but to make a man of him in the shortest period possible at the lowest cost. Dr. Blimber's school fails totally to educate its pupils effectively or to respond to their physical and mental needs as they are growing up. The great clock in the school resounds through the building, and its oppressive chiming symbolizes the equally oppressive system of education that Dr. Blimber advocates.

序

『ドンビー父子商会』(*Dombey and Son*, 1846-48)のなかで、ドンビー父子商会を営むドンビー氏 (Mr. Dombey) と同じように、プリンパー博士 (Dr. Blimber) はプリンパー学校を営む。ふたりはそれぞれの経営方針を正当化するように子どもの成長を早め、すぐに結果を求めるという点において類似しており諷刺の対象となっている。19世紀産業社会の金銭崇拝の非人間性を象徴するドンビー氏と同様に、プリンパー博士の教育は子どもたちを鑄型にはめ、まるで工場で物を作るかのように子どもたちを一人前にしようとする人権を無視した機械的なものである。「世界の工場」と称された19世紀のイギリスは、教育の現場でも文字通り工場と化す。とはいえ、プリンパー学校はドンビー父子商会のように崩壊することはなく、物語を通してその存在や性質は変わることはない。では、時代とともに教育の意味が変わってきたなかで、プリンパー学校の教育とはいったいどのようなものなのであろうか。本稿では、プリンパー学校を構成する教育の意味を考察してみたい。

教育は、その組織や統制の性質ゆえに最も強力な社会的諸勢力の影響を受けやすい。そして19世紀の最も強力な勢力とは産業主義であり、そのなかで教育は資本主義制度の経済哲学をとまっていた。19世紀初頭から中葉にかけてのイギリスの教育政策は、資本と労働の期待を背負い、社会は近代ビジネスの方法や能率を称賛し、それらを入々の心のなか

で、進歩と改革とに結びつけた。産業主義がリードする社会では、18世紀末頃から機械工の学校が多く設けられ、その教育も促進・奨励された。¹ ピプチン夫人 (Mrs. Pipchin) が学校の月謝の高さをメリットのひとつと見なすように、プリンパー学校のような私立学校の学校経営はビジネスの問題であるとされた。

大陸のヨーロッパ諸国からイギリスの教育にもたらされた影響は、16世紀の宗教改革に始まる英国国教会の福音主義的運動、ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) による急進的教育論、そして1790年代の政治的急進主義、功利主義、自由経済主義、それからフレーベル (Friedrich Wilhelm August Froebel, 1782-1852) の進歩的な思想である。しかしながら、これらの影響は少数の個人経営の学校に限られ、パブリック・スクールやグラマー・スクールにはほとんど影響を与えなかった。私立学校のひとつとして描かれるプリンパー学校の教育システムもイギリスの伝統的な教授法を採用し、この物語では特にプリンパー博士の詰め込み式やり方と強制的な密室方式を槍玉にあげ非難する。

18世紀後半頃からグラマー・スクールでは古典語に加え、自然諸科学、フランス語やドイツ語といった近代言語を科目に組み入れる傾向にあったが、² プリンパー学校ではそのような変化は皆目見当たらない。プリンパー学校で諷刺されるラテン語やギリシア語の古典語は、パブリック・スクールやグラマー・スクールの重要科目として位置づけられるが、プリンパー学校では誇張するかのようにラテン語とギリシア語の学習が行われ、そして宗教教育や道徳教育さえ排除され、そこにはまともな子どもはひとりもおらず、不適切な教育によって人生や人格を歪められる。

1. プリンパー博士の教育方針

『ドンビー父子商会』において、ドンビー氏の経営するドンビー父子商会が商業界の権化であるとするならば、プリンパー博士が経営する学校は教育界の権化として描かれる。プリンパー学校は、いわば、ドンビー父子商会のもうひとつの組織として、傲慢と非人道的教育のシンボルをなす。その「偉大なる温室」(“a great hot-house”)で行われる教育は能率を崇拜し、物を生産する工場の様相を呈する。19世紀、イギリスの産業革命によってもたらされた機械化はまさに教育界のなかにも浸透していた。つまり、『ドンビー父子商会』のなかで描かれる教育のプロットは、産業志向によって教育が人間味を失い、機械的になった悲劇を物語っている。

プリンパー学校の最高権力者プリンパー博士もドンビー氏と同じように横柄で尊大、そして認識の甘い人間である。彼は外面的な生徒管理を優先させ、管理上の能率本位に仕組まれた教授方式を行う。フィリップ・コリンズ (Philip Collins) が述べるように、プリンパー博士は教師という職業の先頭に立ってはいるが、結果的には、悲惨的なものを生み出している。³ プリンパー博士は今のところ12人の子どもを預かっているが、少なくとも100人の子どもをあずかる準備を常に整えており、それは彼にとってビジネスであり、子ども

たちに知識を詰め込むことは彼の人生の喜びでもある。プリンパー博士は子どもたちを無理に苦しめようとはしないけれども、軽率で無分別な子どもたちの親の称賛に励まされて満足しているため、自分の学校の教育を見直して方針を変えとはとても思えない。そして「偉大なる温室」のプリンパー学校では古典語の授業が多量に課せられ、子どもたちを苦しめる。

All the boys blew before their time. Mental green-peas were produced at Christmas, and intellectual asparagus all the year round. Mathematical gooseberries (very sour ones too) were common at untimely seasons, and from mere sprouts of bushes, under Doctor Blimper's cultivation. Every description of Greek and Latin vegetable was got off the driest twigs of boys, under the frostiest circumstances. Nature was of no consequence at all.⁴

プリンパー博士の無分別な教育は、トーマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) の『衣服哲学』(*Sartor Resartus*, 1833-34)のなかでトイフェルスドレック (Teufelsdröckh) という哲学者が主張するように、⁵ 非人道的で功利主義に基づいた考えであることが分かる。その「偉大なる温室」の温度がどんなに高く設定されていようとも、プリンパー博士は子どもの親の要望があれば常に温度を上げる用意がある。彼はドンビー氏の要望、それも不適當な要望に対し、教育者としてドンビー氏の息子ポール (Paul) の教育について適切な助言をしない。プリンパー博士は幼いポールを見たとき、少しあきれたように “Shall we make a man of him?” (142) と言う。プリンパー博士はポールが学校に入るには早すぎると思っているので、ポールの “I had rather be a child.” (143) という返答に対して同感の意を表す。そして、プリンパー博士は、遠慮がちにドンビー氏の意向をうかがいながら “You would still wish my little friend to acquire ” (143) と言いかけると、ドンビー氏は “Everything, if you please, Doctor.” (143) と間髪をいれず答える。ポールの入学はプリンパー博士とドンビー氏との間で交わされるビジネスとしての契約である。ポールを介してふたりが利益を求め一方で、ポール自身は大好きな姉のフロレンス (Florence) から引き離され、望まない入学という不適切な扱いを受けて死を早めることになる。

ドンビー氏にとってポールは “infant” でも “boy” でもなく、早くもビジネスパートナーであり、ドンビー氏がポールに施すのは初歩的な養育でもなく教育でもない。したがって、ポールが「お金って何？」という初歩的で根本的な質問をすると、ドンビー氏は、うろたえてしまう。そして金銭に絶対的な信頼をおくドンビー氏は、金銭の全能性をポールに言って聞かせる。しかしドンビー氏にとって価値のあるものでも、ポールにとっては何の意味も持たない。

ドンビー氏が金銭を絶対視するのと同じく、イギリスにかなり強い影響を及ぼしていた18世紀のフランスの哲学者たちは、教育は「相当なこと」ができ、「何でもできる」と考え

ていた。⁶ ルソーが、子どもはもともと善良なのであり、墮落した社会が子どもを墮落させるのだと『エミール』(*Émile*, 1762)のなかで述べるように、⁷ ブリンバー学校の多くの子どもたちはその墮落した学校によって墮落する。ポールはますます“old-fashioned”(古風じみた)になり、彼の異変に気づいたブリンバー夫人(Mrs. Blimber)はブリンバー博士にそのことをもちかける。ブリンバー博士は夫人の言うことを否定はしないけれども相変わらず安易に多くの勉強をさせることで解決しようとする。そして彼の娘コルネリア(Cornelia)に“Bring him on, Cornelia! Bring him on!”(182)と命じ、彼女は絶えず可能な限り活発にポールを教育する。子どもたちの中には、やがて詩人の想像力も、聖人の教えも、ただ単に言葉と文法の寄せ集めにすぎず、まったく意味のないものだという結論に達し、そこから永遠に抜け出せなくなってしまう者もいた。そしてブリンバー学校の生徒で最年長のトゥーツ氏(Mr. Toots)は、ある日突然、花が咲かなくなり、単に茎だけになって学校に留まっているのである。他の子どもたちは、ブリンバー博士がこのトゥーツ氏に勉強をやらせすぎたのだとか、髭が生え始めると脳の成長が止まってしまうのだと噂する。フィリップ・コリンズが述べるように、トゥーツ氏は『ドンビー父子商会』のなかで誤った教育方法の危険性を示している象徴的な人物である。⁸

ブリンバー博士と同じように、彼の家族やブリンバー学校の教師も機械的な人間として描かれる。教師の一人として働いているコルネリアもまたブリンバー博士に教育された機械的な人間のひとりで、“コルネリア”というラテン系の名前がブリンバー学校の古典語教育の徹底ぶりを強調する。彼女は使われなくなった古い言葉の墓場で働く情味に乏しい人間で、自分が育てられてきたやり方を単純に信じている。ポールはなぜコルネリアの髪はフロレンスのように長くないのか、なぜ男の子のようなのか不思議に思う。そしてポールはコルネリアのメガネが光の反射で彼女がどこを見ているのか分からず、彼女には目がついていないのではないかとすら思う。ポールを担当する彼女は、ポールのような幼い子どもにとって過酷な課業を当然のようにやらせ、自分は良いことをしているのだと心から思っている。彼女は“Analysis of the character of P. Dombey”(180)というポールの調査書を彼の前で読みあげ、ポールの性格や能力を数量評価し、ポールという人間を知り尽くしたつもりである。しかし、ポールは彼女の言う数字が何を意味するのかわからず、ただじっと黙って聞くだけである。

ブリンバー博士の助手として働いている文学士フィーダー氏(Mr. Feeder, B.A.)は“a kind of human barrel-organ”(140)と描かれるように機械的で単調な人間である。彼はいつもブリンバー学校の「偉大なる温室」に風を送り込み、ますます温度を上げるかのように子どもたちを教育する。もっと早くからその“barrel”の速さを変えることを身につけていたかもしれないが、不幸にも彼はひとつのテンポしか持っていない。子どもたちがフィーダー氏から教わるものは“stony-hearted verbs, savage noun-substantives, inflexible syntactic passages, and ghosts of exercises that appeared to them in their dreams”(140-41)であり、彼の単調な教育は子どもたちを当惑させる。

プリンパー学校の指導者たちの意図は純粹に教育的、人間的なものではなかった。ここでは誤った教育論がまかり通っており、認識の甘いプリンパー博士にその誤りを直すだけの考えはなく、またコルネリアもプリンパー夫人も、それからフィーダー氏をはじめとする教師たちも、プリンパー博士の考えを疑うことなく信じているので彼を諷める人は誰もいない。

2. 教育の産業化

プリンパー学校の教育が19世紀イギリスの産業主義に大きく影響を受けているということは明らかである。ディケンズは産業主義と教育とを重ねて、プリンパー学校で行われる非人道的な教育を非難の対象として描く。ディケンズは『ドンビー父子商会』以前に『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*, 1838-39)のなかで学校教育の問題を取り上げている。そのなかでディケンズが非人道的な私立学校を暴露したことを契機に、イギリスの多くの私立学校が廃校に追い込まれたのは事実である。⁹ ヨークシャー寄宿学校で起こった虐待問題を扱った『ニコラス・ニクルビー』とは異なり、『ドンビー父子商会』ではプリンパー学校で行われる機械的で功利主義的な教育を非難の対象とする。

プリンパー学校では、子どもたちが休暇をとることがまるで工場の労働者が仕事をさぼるかのごとく、けしからぬことと考えられている。そして長期休暇のときは喜びの声を上げることも、また一斉に休暇に入ることもけしからぬ事と考えられているので、子どもたちは学校から滲み出すかのようにじわじわと休暇に入ることになっている。それはまるで工場を遊ばせずフル稼働させ、少しでも物を生産しようとするかのようにであり、あるいはまた子どもたちを少しでも「偉大なる温室」の中に入れておこうとするかのようにである。子どもたちにとって重要な学校の建物のなかは、子どもの学校生活のために気を配っているとはとても思えない居心地の悪い場所である。窓には、寸足らずで傾き、くすんだ色をしたカーテンがかかり、机と椅子は算数問題の数字のようにいくつも列をなして置かれてある。儀礼の間の炉はめったに火が入れられず、食堂はとても食事をする場所とは思えないような場所である。プリンパー学校の教育は子どもにできるかぎり金と労力を費やさずに能率よく一人前の人間を作り出そうとする。子どもたちには次から次へと課題が与えられ夕食がすむとすぐにまた勉強が再開する。“Gentlemen, we will now resume our studies.” (159)という合図がプリンパー博士によって頻繁に発せられ子どもたちを勉強に駆り立て、“The studies went round like a mighty wheel, and the young gentlemen were always stretched upon it.” (159)と述べられるように子どもたちにとってプリンパー学校の課業は苦行でしかない。そしてプリンパー博士の“Gentlemen, we will resume our studies at seven tomorrow.” (156)という閉めの言葉でその日の勉強が終わる。

プリンパー学校でひととき存在感のあるのが広間の大時計である。その屋根裏にいても聞こえそうな大時計はまさに管理の象徴である。プリンパー学校に入学するために父親に

連れてこられたポールは、プリンパー博士の口調とその大時計の針が刻む音との区別がつかず、プリンパー博士が “How do you do, my little friend?” (142) という言葉を、大時計が “how, is, my, lit, tle, friend?” (142) と言っているように聞こえ、ポールはその両方に対して返事をする。プリンパー学校を統制しているのはプリンパー博士でありまたその大時計なのである。ポールはその大時計の針が刻む音に強くひきつけられ、じっと聞き入る。大時計によって表される時間の経過は、老いそして死へと向かう一方通行の絶対的な流れを示す。プリンパー学校で生活するようになったポールはますます “old-fashioned” の様相を呈し、その大時計は人の一生を管理する死のイメージとしてポールの死を暗示する。

19世紀後半いくつもの労働にかかわる法律が制定され、たびたび工場法が改正されるが、そのポイントは年齢と性別、そして時間であった。労働時間に制限をもうけ24時間を形式化することによって経営者と労働者の時間の概念に一貫性を持たせることになる。そして時間自体が商品価値をもち、時間を管理することが重要なこととなった。それは結果的に経営者によって労働者が管理されるという仕組みを作り出した。

時間という点で、ポールがその大時計の整備にやってきた作業員に鐘と時計についてたずねる場面はとても興味深い。

Paul asked him a multitude of questions about chimes and clocks: as, whether people watched up in the lonely church steeples by night to make them strike, and how the bells were rung when people died, and whether those were different bells from wedding bells, or only sounded dismal in the fancies of the living. (188)

ここでもポールの関心は死から離れることはない。彼は自分が死んでこの世を去った後に起こること、そして残された人々の様子を知りたいと思い、自分がその場を去った後の様子を思い浮かべる。彼のこうした視点は彼がプリンパー学校を去るときにも見られる。

He had to peep into those rooms upstairs, and think how solitary they would be when he was gone, and wonder through how many silent days, weeks, months, and years, they would continue just as grave and undisturbed. He had to think would any other child (old-fashioned, like himself) stray there at any time, to whom the same grotesque distortions of pattern and furniture would manifest themselves; and would anybody tell that boy of little Dombey, who had been there once? (189)

ポールが思い描く未来のプリンパー学校もやはり重々しく寂然としている。

ポールはさらにその大時計を修理する作業員にアルフレッド大王 (King Alfred) がロウソクの炎で時間を計ったことについてどう思うかと尋ねると、その作業員は “it would be the

ruin of the clock trade if it was to come up again.” (189) と答えるのはユーモラスであると同時に非常に現実的な応えであり、産業主義社会の住人であることを示している。大時計の整備が終わると、大時計は再びいつものように動き出し、ポールにはいつものような質問が大時計から聞こえてくる。ここで、ロウソクの炎と時計とは有限と無限というコントラストを生み出している。ロウソクで時間を計ったならばいずれ終わりが来るけれども、時計は修理と整備を繰り返すことによって半永久的に動きつづけるということを示唆する。それは死の世界を意識するポールの“old-fashioned”にも結びつくことであり、ロウソクによる時間の観念と時計による時間の観念とにおける二つの死生観をしめす。そしてまたその厳粛で古い大時計は産業主義の工場にそくして考えると、休みなくそして終わりなく働きつづけるということになるであろう。皮肉にもロウソクは子どもたちが次の日の予習をする時に使用される。

3. ブリンバー学校の古典語教育

18世紀後半から19世紀前半にかけて、アダム・スミス (Adam Smith, 1723-90)の自由経済思想とベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832)の功利主義は教育のカリキュラムにも変化をもたらした。古典語を教えることを目的として設立されたグラマー・スクールでの科目は、古典語に加えて近代的な科目が導入されはじめた。しかしながら、ほとんどのグラマー・スクールやパブリック・スクールはそれらの新しい思想や教育理論の影響を受けず、その体質は変わらなかった。ブリンバー学校でもイギリスの伝統的教育が続けられ、子どもたちは古典語を中心とするカリキュラムを受ける。

They comprised a little English, and a deal of Latin names of things, declensions of articles and substantives, exercises thereon, and preliminary rules a trifle of orthography, a glance at ancient history, a wink or two at modern ditto, a few tables, two or three weights and measures, and a little general information. (158)

カリキュラムの大部分を古典語に割かれ、ラテン語をまったく解しないポールは、ふたつ目の単語を書くあいだにひとつ目の単語を忘れてたり、ある単語の断片が別の単語につながったりして混乱する。ポールは大好きな老水夫グラブ (old Glubb) と話がしたいと訴えるが、コルネリアは ‘I couldn’t hear of it. This is not the place for Glubbs of any kind.’ (159) と言ってそれを却下し、山積みの課題をひとつひとつこなすよう命じる。グラブはポールの乗った手押し車をブライトン (Brighton) の浜辺まで押してゆき、そこでポールに深海の素晴らしさなどを話して聞かせ彼の想像を駆り立てた人物である。古典語の暗唱と反復練習ばかりを課すブリンバー学校では想像の世界は価値をもたない。フィリップ・コリンズによれば、ディケンズのブリンバー博士に対する主な批判は、子どもたちに古典語の学習を

強制するのが早すぎたという点と、子どもたちの能力や興味関心は、各人それぞれ違うということを許容しなかった点である。¹⁰ ポールはクラブと話をさせてくれたら行儀よくすると懇願するほど、クラブの話を聞くことに関心を持った。コルネリアがポールの担当となって、彼女はまず彼に年齢を尋ね、その次には‘How much do you know of your Latin Grammar, Dombey?’ (148) と、ラテン語の習熟度について尋ねる。プリンパー学校では当時のイギリスのパブリック・スクールやグラマー・スクールで一般的だったように、子どもたちの評価は古典語の到達度によって測定される。そして、‘None of it.’ (148) と応えるポールに彼女はショックを受ける。ポールが訴えるように、ほんの少しでも老水夫クラブと話をすれば、ポールはもっとよく勉強ができたかもしれない。

ポールが自分の虚弱体質を訴えると、コルネリアは強くならなければならないと彼に言う。厳格なコルネリアの態度は、ピプチン夫人の言葉にあるように「辛抱強くやらせる」ことにある。

‘There is a great deal of nonsense and worse talked about young people not being pressed too hard at first, and being tempted on, and all the rest of it, Sir,’ said Mrs Pipchin, impatiently rubbing her hooked nose. ‘It never was thought of in my time, and it has no business to be thought of now. My opinion is “keep ’em at it”.’ (137)

ピプチン夫人は、ポールがプリンパー学校に入る前に預けられた未亡人であるが、彼女は“a great manager of children” (98) として知られており、その管理の仕方は子どもたちに彼らの嫌いなものをすべて与え、彼らが欲しいものを一切与えないというものであった。そしてピプチン夫人は自分の職業の伝統に忠実で、たとえ子どもを苦しめようとも辛抱強くやらせることを強く主張し、「子どもの心を瑞々しい花のように、自ら成長して咲くように促すのではなく、牡蠣の殻を力づくでこじ開けるようなやり方」で子どもたちを教育する。

ポールと同じ部屋のブリッグス (Briggs) は悪夢のような課業に悩まされ、トウザ (Tozer) もまた悪夢にうなされて眠っているときもギリシア語やラテン語の習っていない言葉の断片を口にすることさえあり、そうした言葉は夜の静寂のなかで口にできないほど不快なものとなっていた。そして彼は学業を終える頃には古代の事柄を本物の古代ローマ人とほとんどおなじくらいに修得したのだった。プリンパー博士は無理やり子どもたちに教え込もうとはしないけれども、20 時過ぎに床につき 7 時に勉強が再開するプリンパー学校のスケジュールは、眠りについてさえも子どもたちを悩ませる。トウザは悪夢のせいでよく眠れず、朝起きると顔が脹れる。ポールは心地良い眠りのなかでフロレンスと手をつないで一緒に美しい庭を歩く夢を見る。しかし、起床を知らせるベルによって夢がさえぎられると、再び暗くてもの寂しい現実へと引き戻される。

結び

プリンパー学校で行われる教育は、そこで学ぶ子どもたちのためというよりもむしろ、彼らの親や社会のためにどうあるべきかを考えて施されるものである。そして学校で行われる教育の内容が重要なのではなく、行われる行為それ自体が重要視された。しかしそれは、カーライルが『衣服哲学』のなかで、アリストテレスの言葉を引用してトイフェルスドレックに反論するように“*The end of Man is an Action, and not a Thought.*”¹¹ということがプリンパー学校の教育を正当化することになる。ただし、ディケンズは『ドンビー父子商会』のなかでパブリック・スクールやグラマー・スクールの伝統的な教育自体を非難しているのではなく、ディケンズの非難の目はプリンパー学校の教育方針に向けられる。プリンパー博士は強制的な詰め込み式教育を子どもたちに施し、コルネリアや他の教師にそれを実践させる。そしてコルネリアはポールが学校を去るとき、自分は強制者であるにもかかわらず‘*Dombey, Dombey, you have always been my favourite pupil. God bless you!*’ (198)と述べるように、ディケンズは教育者たちの無知を非難する。ポールの教育をすべてプリンパー博士に任せるドンビー氏も、プリンパー博士の教育システムを称賛する親たちも同様に、無知でおろかな人間である。

『ドンビー父子商会』におけるプリンパー学校の教育に対する批判は、無分別で不適切な教育がなされることにある。それはプリンパー学校の描写に明らかなようにすべて歪んでいる。プリンパー学校に対する非難は、古典語の強制と、間違った教え方、そして子どもらしい想像力が無視されたことである。「偉大なる温室」の不適切な教育は子どもたちを苦しめ、彼らの人間形成に大きな弊害をもたらす。ポールはプリンパー学校の教育によって死を早め、トゥーツ氏はプリンパー博士によって詰め込まれすぎて、プリンパー学校ではもはや彼にすることは何もなく、また彼にできることも何もない。そしてブリッグスやトウザは休みなく与えられる古典語の勉強によって眠りさえも侵されてしまう。

プリンパー学校とドンビー父子商会との違いを挙げるとするならば、それはプリンパー学校は崩壊しないということである。金銭崇拜と能率崇拜の教育という点において、プリンパー博士はドンビー氏に相当する人物として考えられるけれども、その人物描写は必ずしも悪人として描かれてはいない。プリンパー博士は何の報いも受けることなく、またドンビー氏のように絶望と死の境地に立たされることもなく、プリンパー学校の経営者の地位から退く。プリンパー博士が引退した後、彼の助手の文学士フィーダー氏が後継者となり、さらにフィーダー氏はプリンパー博士の娘コルネリアと結婚するという展開をむかえる。そして、プリンパー博士は自らの過ちを償うかのように経営者の地位をゆずる。

The Doctor had determined to paint the house outside, and put it in thorough repair; and to give up the business, and to give up Cornelia. (814)

この引用文にはプリンパー学校の方針転換がほのめかされているけれども、経営者がプリンパー博士からフィーダー氏に変わっても、プリンパー博士と同じ機械的で子どもたちを苦しめるフィーダー氏とプリンパー博士の教育を受けた厳格なコルネリアが経営する学校も、プリンパー学校の広間にある大時計の整備をするのと同じように、今までどおり変わらない。ドンビー氏は傲慢で非人間的なふるまいの結果、会社の倒産という報いを受け、富と名誉を失ったけれども、フロレンスの変わらぬ愛情を受け入れることによって人間的ぬくもりをもった人間に生まれ変わることができた。プリンパー博士は金儲けを優先し、子どもたちに不適切な教育を施しさんざん苦しめた挙句、経営者から退くときには、学校の外観を取り繕おうとするだけで、物を生産する工場のような「偉大なる温室」は子どもたちを苦しめ続けることに変わりはない。

注

- 1 グラスゴーでは 1796 年にアンダーソンズ・インスティテューションが、ロンドンでは 1823 年にロンドン職工講習所が、マンチェスターでは 1829 年に新マンチェスター職工講習所が設立された。
- 2 Michael Sanderson. *Education, Economic Change and Society in England 1780-1870*. (New York: Cambridge University Press, 1995) 31.
- 3 Philip Collins, *Dickens and Education*. (London: Macmillan, 1963) 141.
- 4 Valerie Purton, ed., Charles Dickens, *Dombey and Son* (London: J. M. Dent, 1997) 139. 以下、テキストの引用は頁数を括弧内に示す。
- 5 トイフェルスドレック氏は次のように述べる。‘I too acknowledge the all-but omnipotence of early culture and nurture: hereby we have either a doddered dwarf bush, or a high-towering, wide-shadowing tree; either a sick yellow cabbage, or an edible luxuriant green one. Of a truth, it is the duty of all men, especially of all philosophers, to note-down with accuracy the characteristic circumstances of their Education, what furthered, what hindered, what in any way modified it.’ quoted in Thomas Carlyle, *Sartor Resartus / On Heroes, Hero-Worship, and The Heroic in History*. (London: J. M. Dent, 1908) 71.
- 6 John Lawson and Harold Silver, *A Social History of Education in England*. (London: Methuen, 1973) 229.
- 7 J. J. Rousseau, *Emile*, trans. Barbara Foxley (London: J. M. Dent, 1911) 5. ルソー『エミール』の冒頭部分を次に引用する。“GOD makes all things good; man meddles with them and they become evil. He forces one soil to yield the products of another, one tree to bear another’s fruit. He confuses and confounds time, place, and natural conditions. He mutilates his dog, his horse, and his slave. He destroys and defaces all

things; he loves all that is deformed and monstrous; he will have nothing as nature made it, not even man himself, who must learn his paces like a saddle-horse, and be shaped to his master's taste like the trees in his garden.”

- 8 Collins, 142.
- 9 Collins, 103-4. イギリス学校教育の実態を暴露し非難したのはディケンズに限らず、19世紀当時、*Quarterly Review* や *Edinburgh Review* といった誌上で多く論じられた。
- 10 Collins, 141.
- 11 Carlyle, *Sartor Resartus / On Heroes, Hero-Worship, and The Heroic in History*, 119.

参考文献

Collins, Philip. *Dickens and Education*. London: Macmillan, 1963.

Lawson, John and Harold Silver. *A Social History of Education in England*. London: Methuen, 1973.

Sanderson, Michael. *Education, Economic Change and Society in England 1780-1870*. New York: Cambridge University Press, 1995.

梅根悟ほか『イギリス教育史』東京：講談社，1974．

長尾十三二『西洋教育史』東京：東京大学出版社，1978．

松村昌家ほか編『帝国社会の諸相』東京：研究社出版，1996．

出典：『甲南英文学』第17号（甲南英文学会、2002年7月）29-41.